姨捨の棚田の維持・発展へ

長野県千曲市　淺野恵介

１．はじめに

長野県の北部に位置する千曲市は、平成 15 年 9 月 1 日に更埴市、戸倉町、上山田町の 1 市 2 町が合併し誕生した。人口は、合併当初の平成 15 年の 6 万 4,480 人をピークに減少を続け、現在は 59,304 人（令和元年 5 月 1 日現在）である。総面積は約 120 平方キロメートル、西は冠着山（かむりきやま）、東は鏡台山をはじめとする山地に囲まれている。そのほぼ中央を、東南から北東に大きく曲がりながら千曲川が流れており、千曲川をはさんで両岸には平坦部が広がり、北は善光寺平に接している。

姨捨の棚田は、市の北西部に位置し、標高は 460～550m の範囲に、64.5ha、約 1,500 枚に及ぶ大小の棚田があり、日本の棚田百選、国の名勝指定、重要文化的景観に指定され、文化的な価値も評価されている。近隣には日本三大車窓の姨捨駅、日本夜景百選の姨捨 SA などの名所もあり、美しい景観が多くの観光客を魅了している。また、JR の姨捨駅や高速道路から近く、交通の利便性も良い。

姨捨の棚田は千曲市の観光資源として重要な役割を果たしているが、そこには地権者や棚田の保全団体の維持管理に対する努力がある。現在、耕作の担い手の約 7 割が地元の地権者、約 2 割が地域住民で構成される保全団体となっている。

しかし、棚田は傾斜地であるため、大型の機械が使えず手作業が多く負担が大きいことに加え、担い手の高齢化や近年の米価の下落等により、全体の 2 割が耕作放棄地となっている。今後、地権者や保全団体構成員の高齢化が進む中で、さらに耕作放棄地が増加してしまうことが予想される。

耕作放棄地が増加してしまうと、水源の涵養、多様な生物の生息地形成、斜面の地滑り防止など棚田が持つ多面的機能の崩壊や、景観の魅力低下による観光業への影響など、様々な問題につながる。そのため、千曲市では棚田の耕作継続が課題となっている。

筆者は平成 29 年から現在まで棚田振興業務を担当していると同時に、保全団体である「名勝姨捨棚田倶楽部」へ加入している。その中で、本レポートにおいて姨捨の棚田の耕作継続のため、地域の仕組構築を提案するものである。参考として、他地域の棚田において保全活動で成果を上げている事例、令和元年度の姨捨の棚田での事業の取り組みを元に、検討していきたい。

２．姨捨の棚田における保全活動

（１）棚田貸します制度（オーナー制度）

棚田貸します制度は、特定農地貸付法により市が棚田を地権者から借受け、オーナーを希望する市民に貸し付ける制度である。オーナーは会員登録制で、田植えや稲刈り、脱穀等の行事への参加と、収穫物を受け取る仕組となっている。行事外の棚田の管理や農作業

指導は、地元農家による保全団体「姨捨棚田名月会」に委託している。

平成 7 年度に「ふるさと水と土保全モデル事業」を導入して耕作放棄された区画に対し景観保全型の棚田整備を行い、翌平成 8 年度に更埴棚田保全推進協議会（現千曲市棚田保全推進会議）を設立し、当制度は始まった。制度は好評を博し、徐々に対象区画を増やした結果、面積は 2.2ha、150 枚の棚田まで拡大した。事業開始当初約 20 組であったオーナーは、令和元年度現在 92 組まで増加した。県外からの申込も 45 組（令和元年度）あり、全体の約半数を占めている。オーナーの内訳としては、親子連れの家族や、定年退職を機に農業を始めた人、地元の小中学校、東京都の中学校、民間企業の福利厚生のためと、多岐にわたる。

しかし、当制度の実働団体である姨捨棚田名月会の高齢化（平均年齢 70 歳以上）と会員の減少により、今後の担い手確保が喫緊の課題となっている。

（２）主な保全団体とその取組

①千曲市棚田保全推進会議

棚田貸します制度の実施主体であり、各保全団体、棚田関係者、土地改良区、ながの農協、千曲市関係部局（農林課、農業委員会、観光交流課、教育委員会、都市計画課）が参画している。

②全団体

姨捨の棚田には、6 つの保全団体があり、姨捨の約 2 割の棚田に対し、各団体で様々な活動を展開している。

（ⅰ）田毎の月棚田保存同好会

長野県職員が中心となり、平成 8 年に発足した。都市住民や地元小学校らと積極的に交流事業を行っている。

（ⅱ）四十八枚田保存会

長楽寺の田を所有している地元農家が中心となり、平成 7 年に発足した。名勝指定を受けた四十八枚田の伝統的形態を維持しながら保全活動を行っている。

（ⅲ）姨捨棚田名月会

棚田貸します制度の実働班として、地元農家を中心に平成 8 年に発足した。オーナーへの指導だけではなく、他団体への稲作の指導等も行っている。

（ⅳ）科野農業塾

旧戸倉町と県農業改良普及センターが開催した「さらしなの里農業塾」をきっかけに平成 15 年に発足した。市内の小学校と交流事業を行っており、食育活動にも取り組んでいる。

（ⅴ）姨捨棚田会

地区内外の人が集まり、平成 24 年に発足した。長期間耕作放棄されていた田を復田し、姨捨棚田名月会の指導を受けながら耕作を行うほか、独自のイベントも開催している。

（ⅵ）名勝姨捨棚田倶楽部

千曲市役所職員が中心となり、平成25年に発足した。平均年齢40歳前後と比較的若い世代で構成され、若い力として期待がされている。都市住民や世帯間交流に重点をおいて活動し、市内の空き家を改修した活動拠点『OASIS（オアシス)』は、保全活動の憩いの場となっている。

上記以外にも、営農農家、棚田のふもとにある認定保育園、昨年から姨捨でゲストハウスを始めた経営者等、多様な主体が棚田の保全に関わっている。これらは月に1度の代表者会議を実施し、高齢化による危機感の共有や、企画の共有・提案など連携体制をとっている。会議で意識を共有することで、団体間の垣根を超えた保全活動につながり、棚田の景観保護への前向きな姿勢が醸成されている。

（３）荒廃農地の現状と活用

千曲市農業委員会が平成 26 年度から実施している、専用のパトロール地図を使った荒廃農地調査の結果は下記のとおりである。(表1)

（表1）荒廃農地調査（姨捨の棚田重要文化的景観指定抜粋）　（㎡）

	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年
再生可能な遊休農地	28,063	31,143	30,611	31,844
再生不可能な遊休農地	25,092	22,076	21,587	21,587

千曲市は、再生可能性が見込まれる遊休農地の活用として、令和元年度からミョウガの試験栽培を行った。一度遊休農地となってしまった水田では、復田するために2～3年かけて土づくりを行わなければならず、また、傷んだ水路の改修も必要となるため、多くの時間と費用がかかる。そのため、栽培が容易かつ比較的やせた土地でも栽培可能なミョウガが選定された。

長野県改良普及センター（以下：普及センター）の指導の下、4 枚の田の草取り、田おこし、土づくり、ミョウガの定植を行った。その後、9 月の稲刈り時には、数十株を収穫することができ、このまま適正な管理を続ければ、来年の5月にはさらに多くの収穫が期待できると普及センターから評価を受けた。遊休農地の活用方法の一つとして、今後期待を持てる結果と言える。

３．他の地域における棚田の事例から

（１）大山千枚田（現地聞取より）

大山千枚田は、千葉県鴨川市釜沼地区にある千葉県指定名勝の棚田である。嶺岡山地のふもとに、急傾斜に総面積約3.2haの大小375枚の田んぼが連なって階段状を為し、景観の美しさが評価されている。

大山千枚田では、平成9年に千枚田の地権者と支援者によって『大山千枚田保存会』が設立され、平成12年から関東地区で初となる棚田オーナー制度を開始した。平成15年に

は、保存会が法人認証をとり、現在は『NPO法人 大山千枚田保存会』として棚田の保全活動を行なっている。

NPO法人大山千枚田保存会は、「棚田オーナー制度」「棚田トラスト制度」「大豆畑トラスト制度」「酒づくり制度」「綿藍トラスト制度」「家づくり体験塾」「自然体験活動」と棚田に留まらず多様なオーナー制度を展開している。当初、オーナーは定年退職を迎えた高齢者が多かったが、近年は若い夫婦が多く、親子参加が増えたことにより、子供の声が聞こえる地域になってきた。しかし、都心から近いため日帰りで参加するオーナーも多く、地域の民宿での宿泊に繋がらないことが課題となっている。

当地で特徴的なのは、大豆畑トラスト制度である。復田が困難な田を利用して大豆を育て、耕作放棄地の縮小を図る制度である。制度の内容としては、大豆の種播きから収穫までの畑作業を体験し、収穫した大豆を参加者で均等に分けるものである。収穫された大豆を使った味噌、豆腐作りも開催し、農村景観の保全だけでなく、日本の食文化を守っていく役割も果たしている。

理事長の石田三示氏は、「耕作放棄地があるから出来ることがある。土地・農地があるから何かができる、耕作放棄地・高齢化だから出来ることをポジティブに考える」という発想を持ち、様々な活動を展開しているという。

本聞き取り調査から、大山千枚田は多種多様な制度や活動により、棚田を保存していることがわかった。大豆畑トラスト制度といった特徴的な制度から、綿藍トラストや家づくり体験塾など、農業を超えた制度も確立し、参加者のニーズを把握して集客から移住を見据えた企画を行っている。

姨捨の棚田でも、従来のオーナー制度でなく、耕作放棄地や高齢化をポジティブに考え、事業を実施していく必要があるのではないか。

（２）稲倉の棚田（現地聞取より）

稲倉の棚田は、長野県上田市殿城地区の棚田である。姨捨の棚田から車で1時間30分程の距離にあり、標高640～900ｍの山間に、総面積約30haの大小様々な780枚の田んぼが連なっている。北アルプスを望む美しい山岳景観から「日本の棚田百選」に選定された。

稲倉の棚田では、平成12年に『稲倉保全と活性化をすすめる会』が設立され、ボランティアによる荒廃田の伐採及び草刈りによって棚田の再生が行われた。その後、平成15年に地域・JA・行政の関係団体と統合し、現『稲倉の棚田保全委員会』が設立された。

稲倉の棚田では、「棚田米オーナー制度」「酒米オーナー制度」「棚田サポーター」「学校体験学習」といった体験・交流の場を展開しているほか、他の棚田では見られない、特徴的な体験アクティビティやイベントを行っている。

①棚田アドベンチャーガイド

広大で標高差が大きく、歩いて回るのが大変な棚田を4人乗りフルオープンの360ｃｃ軽トラック「バモスホンダ（1971年式）」に乗り、「稲倉のミステリー」や「絶景フォトスポット」のガイド付きで棚田探索を楽しめるアクティビティとなっている。(30分、1名あたり2,000～3,000円)

②イーグルフライトアドベンチャー

「棚田は空を舞う『鷲の目線』からどう見えるか」というコンセプトのもと、最新ヘッドマウントディスプレイ（特殊ゴーグル）を装着し、標高 900m まで舞い上がるドローンの 4K カメラと連動した大展望の映像を楽しむことができる。撮影データは持ち帰ることも可能である。(30 分、2,500～3,000 円)

③棚田 CAMP

春先と冬の農閑期の田でテントを張り、キャンプを行う。

①～③以外にも様々な活動を行っているが、オーナー制度等の農業体験による保全活動ではなく、農業を活用した新たな商品開発による保全費用の獲得を行っている。また、稲倉の棚田は入場時に「保全活動協力金」の寄付や、業務用撮影機器の持ち込み時用の撮影使用規定として撮影協力金を呼びかける取組も行っている。

姨捨の棚田でも、行政の予算や補助金に頼るのではなく、地域外の外貨の獲得や他の棚田との差別化を図る取組やアクティビティを展開していかなければならないと考える。

（表 2）他の地域における棚田の概要比較表

	姨捨の棚田 （長野県千曲市）	大山千枚田 （千葉県鴨川市）	稲倉の棚田 （長野県上田市）
面積・田の枚数	約 64.5ha・約 1,500 枚	約 3.2ha・375 枚	約 30ha・約 780 枚
標高	460～550m	90～150m	640～900m
オーナー制度 （棚田米のみ）	○体験コース 350 円/㎡（1 区画おおよそ 100 ㎡）、 米は収穫したものすべて ○保全コース 30,000 円　米 20kg	○交流型コース 30,000 円/㎡、 米は収穫したものすべて ○飯米確保型 40,000 円/㎡ 米は収穫したものすべて ○トラストコース 30,000 円　米約 27kg	○白米オーナー 40,000 円　米 30kg ○玄米オーナー 30,000 円　30kg
オーナー制度 （棚田米以外）	なし	○大豆畑トラスト制度 ○酒づくり制度 ○綿藍トラスト制度	○酒米オーナー
指定・選定	○日本の棚田百選 ○国の名勝指定 ○日本国選定重要文化的景観	○日本の棚田百選 ○千葉県指定名勝	○日本の棚田百選

４．姨捨の棚田での新たな取組

令和元年度、姨捨の棚田では新たな取組やイベント・企画が多く実施された。

（１）姨捨アイスの開発（株式会社BEAT ICE）

株式会社BEAT ICEが、姨捨の棚田で収穫された米を原材料にした甘酒アイス「姨捨アイス」の製造販売を開始した。神奈川県葉山町で夫婦が経営するBEAT ICEは、全国の棚田で収穫された米をアイスにし、売上の一部を産地に還元することで棚田の保全に取り組んでいる。平成30年棚田サミットにおいて、姨捨の保全団体会員が経営者と知り合ったことが、『姨捨アイス』を作るきっかけである。BEAT ICEの目指す「日本全国の棚田と人を繋ぐアイス」は、より多くの人に棚田を知ってもらうために、少ない米でも生産可能なアイスを販売している。10キロの米からは約1,000個のアイスが生産可能であり、1個あたり10円が棚田の活動費に還元される。この趣旨に賛同し、姨捨の棚田でも作ることになった。初めて販売した棚田貸します制度の稲刈りイベント時には、100個を完売し、購入者からも評判も上々であった。

今後の展開としては、長野県内の道の駅での販売（道の駅中条では販売開始）、姨捨サービスエリア、千曲市の温泉旅館での提供、ふるさと納税品等が検討されており、アイスをとおして棚田を知ってもらうきっかけや架け橋となることが期待される。これらを提携して販売する事業者や団体も併せて検討中であり、急務となっている。

（２）棚田ヒルクライム（姨捨ゲストハウスなからや）

棚田の傾斜を利用した、自転車によるヒルクライムイベントを開催した。距離800メートルの傾斜をレトロ自転車で登るタイムを競うもので、棚田での開催は初であることから、優勝者はすなわち世界一、という触れ込みでイベントを開催した。11月10日の、台風19号の被災後の開催となったが、県外者やドイツ人など多種多様な参加者が集い、盛り上がりを見せた。グッズ等の売上の一部は令和元年台風第19号の義援金として千曲市に寄付された。自転車好きと棚田という繋がりが新たに生まれるきっかけになるとともに、新たなアクティビティの場としての可能性も見出し、今後の展開が期待される。

来年度からは、ヒルクライム主催者や参加者に、棚田の草刈りや農業体験にも参加してもらうことで、一体的に会場となる棚田を保全していく取組につなげていきたいと考える。

（３）流しそうめん（長野県屋代高等学校附属中学校）

市内に所在する長野県屋代高等学校附属中学校（以下「附属中学校」と言う）が、棚田での流しそうめんイベントを開催した。附属中学校は、農業体験や社会研究の場として棚田貸します制度に参加をしており、機械ではなく昔の道具を使った農作業、貸します制度の参加者や保全団体への聞き取り調査等を行っている。その学習成果を記事にし、棚田通信として棚田のオーナーたちへ送付している。稲刈りの際、棚田の傾斜を利用した流しそうめんを行い、老若男女問わず大勢の人々が集まり流しそうめんを楽しんだ。生徒のなかには、来年は世界一長い流しそうめんを作りたいとの声もあり、棚田の傾斜活用の一つとなった。また、そうめんのつけあわせとして先述した試験栽培のミョウガも同時にPRすることができ、相乗効果が期待される。

このような若い世代の意見や力を取り入れ、棚田の保全につなげていくためには、授業

の一環としてだけでなく、卒業後、その先でも、姨捨の棚田に関わっていきたい生徒の受け皿を作り、受け入れることが必要と考える。

（４）ペットボタル（「信州さらしな田毎の月」実行委員会）

姨捨の棚田の持続可能性の追求の一つとして、姨捨の棚田の活性化のシンボルであるペットボタル（太陽光発電パネル付 LED を使用したライト）の設置、推進活動が行われた。市内の小学校の総合学習事業として導入し、郷土学習・エコ・省エネ学習をすることで、太陽光パネル・充電池・LED 等に関心を抱かせる教育につながった。棚田保全の視点からも、稲刈り後の冬季の観光客の確保のための「田毎の月」の表現ツール、情報発信ツールとして活用ができる。

（５）地権者意向調査（千曲市農林課）

姨捨の棚田のうち、重要文化的景観エリアを有する地権者に今後の営農に関する意向調査を実施した。令和 2 年 3 月頃集計結果の報告の予定となっており、調査結果をもとに、田を手放したい地権者と保全団体や棚田での耕作を希望する方へのマッチングや、棚田全体の販売可能な米の量の把握等に活用可能な情報の収集が見込まれる。

以上が、令和元年度に新たに実施された取組である。一年間を切り取ってみても、新しいものが次々に生まれている。これらの取組は、地域住民や保全団体、地元企業が主体となり、行政がサポートに回っている点が魅力的である。地農業をする場所の枠を大きく超えることができ、千曲市の中心となることができる。

５．まとめ　今後の姨捨の棚田の展開

今後の姨捨の棚田の展開として、棚田貸します制度の充実、外貨の獲得、新たな取り組みの継続、創出が必要と考える。これらの取組に対し、営利活動を伴って運営する担い手がいないことが課題として挙げられる。姨捨の棚田には多くの保全団体があり、それを千曲市棚田保全推進会議が取りまとめている。しかし、推進会議は市が事務局を務めているため、営利目的の活動はできない。大山千枚田や稲倉の棚田等の多くの棚田では、NPO 法人などが担い手となって活動を行っている。棚田を保全するには、多大な費用がかかり、市の財源にも限りがあるため、外貨の獲得によって費用を賄うことが必要である。新しい企画や活動、PR を行っても、現状では姨捨の棚田で活動している人々に入る利益は少ない。耕作意欲の向上は見込めず、新たな担い手の確保はさらに先の話となってしまう。

上記を踏まえ、筆者は「姨捨の棚田公社」（以下、「公社」と言う）の設立を提言したい。

公社設立することで、これまでの多様な取組をとりまとめて一体的に実施、かつ営利活動を可能にするものである。公社の具体的な活動として、4 つの事業を提案する。

一つ目は、農地バンクの創出である。農地バンクとは、登録制の遊休農地管理システムである。農家に遊休農地を登録してもらい、棚田貸します制度への活用や、就農を希望する担い手への情報提供を行い、農業の継続を行う。棚田保全の根底となる、農業を守るた

めの取組である。

二つ目は、独自の HP や SNS による PR である。棚田貸します制度の田のライブ映像を配信することで、より高い密度で関心をもってもらうことができると考える。

三つ目は、棚田貸します制度の発展的な活用・運用である。現在のオーナー制度を拡充し、棚田だけではなく酒米オーナーや先述のミョウガ等の野菜オーナーといった新たなオーナー制度を作ることにより、棚田への多様な関わり方を創出する。また、棚田に無農薬有機農業エリアをつくり、無農薬栽培を希望するオーナーへの対応を行う。多種多様なニーズを受け入れることで、多くの棚田を保全することができると考える。

四つ目は、棚田米の付加価値向上による外貨の獲得である。米のブランド化や、先述の姨捨アイス、棚田米の付加価値を向上させることによって外貨の獲得を行い、保全活動費用を捻出する。

上記を一体的に実施し、一枚でも多くの棚田を保全して景観を維持し、農業の場としてだけはなく、千曲市の顔として守り、展開していきたいと考える。

６．おわりに

長野県では、10 月の令和元年台風第 19 号による、河川の氾濫に伴う住宅の被害、農業被害が甚大であり、筆者自身も台風の発生以降は農業災害の対応業務に追われ、本塾の受講、また修了レポートに着手することができない状況が続いた。

しかし、本レポートで、台風発生前に着手された事業から今後の展開を考察し、提言ができたことは、多く人々との交流、活動、思いがあったからだと感じる。人と棚田を繋げる地域人として今後も活動していきたい。

最後に、本レポートを作成するにあたり、期限が迫る中指導いただいた田村秀先生、ほか講師の皆様、取材や活動で協力をいただいた多数の方々、職場や養成塾事務局のサポートに感謝申し上げる。

≪参考文献・資料≫

・千曲市教育委員会　「姨捨棚田の文化的景観歴史的調査報告書」
・千曲市教育委員会　「姨捨棚田の文化的景観保存計画書」
・千曲市農業委員会　「荒廃農地の発生解消状況に関する調査」
・千曲市農林課　姨捨の棚田紹介資料（棚田シンポジウムで使用したもの）

≪取材・協力≫

・NPO 法人 大山千枚田保存会　・稲倉の棚田保全委員会　・千曲市棚田保全推進会議
・株式会社 BEAT　ICE　・姨捨ゲストハウスなからや　・長野県屋代高等学校附属中学校
・「信州さらしな田毎の月」実行委員会　・姨捨の棚田オーナー